

(付) 大正・昭和のアナキズム系文芸資料

(一) 一般文芸誌

号数

近代思想

大杉栄・荒畑寒村

(二二)

大正元年九月―同三年十二月

文明批評

大杉栄・伊藤野枝

(三)

大正七年一月―同三月

シムーン

佐野襲斐美・津田光造・加藤一夫(他)

大正十一年四月

(同年五月「熱風」と改題、八月までに第四号発行)

(一)

ダムダム

萩原恭次郎・小野十三郎・壺井繁治・林政雄・岡本潤(他)

大正十三年十一月

(一)

文芸批評

新居格・宮島資夫・高群逸枝・川合仁・麻生義・大泉黒石(他)

大正十四年十一月―同十五年一月

(二)

文芸解放

飯田豊二・壺井・萩原・岡本・小野・工藤信・矢橋丈吉(他)

昭和二年一月―同年十一月

(一一)

黒旗は進む 萩原・麻生義・松村元(他)

昭和三年三月

(一)

矛盾

宮島・五十里幸太郎・田戸正春・小川未明・安谷寛一・宮山栄(他)

昭和三年七月―同五年二月

(七)

単騎

飯田豊二・飯田徳太郎・川合仁・矢橋・局清(他)

昭和三年五月―同年九月 (四号以下「矛盾」と合併)

(三)

原始

加藤一夫(個人誌)

大正十四年から昭和二年まで約二四冊(推定)

黒色文芸

植田信夫・星野準二・野村考子(他)

昭和三年十月―同年十一月

(一)

黒色戦線

塩長五郎・丹沢明・八木秋子・飯田豊二・局清・山岡英二・星野準二(他)

昭和四年一月―同年十一月

(七)

黒戦

丹沢・塩・森辰之介・浅弘見(他)

昭和五年一月―同年五月

(三)

アナキズム文学 (「黒戦」改題)

昭和七年五月―同年八月

(四)

黒色戦線(第二次) 鈴木靖之・八木秋子(他)

昭和六年九月―同七年十二月

(八)

近代思想 田戸正春・矢橋文吉(他)

昭和六年四月

(二)

自由を我等に 新居格編集

昭和八年六月―同年十一月

(三)

解放文化(解放文化連盟機関紙) 岡本潤・秋山清編集

昭和八年六月―同八年六月

(一一)

文学通信(解放文化連盟機関紙) 植村諦・秋山清編集

昭和八年八月―同十年十月

(一九)

冬の土 瓜生伝・佐藤正男・石川主計

昭和六年―昭和十年・四十数号を刊行―推定(福島県)

反対 岡本潤・菊岡久利・藤田勉

昭和十年七月―十月

(三)

(注)「冬の土」以外は東京で発行。

(二) 詩 誌

赤と黒 萩原恭次郎・岡本潤・壺井繁治・川崎長太郎・小野十三郎

大正十二年一月―同 (東京)

(五)

銅 鑼 草野心平・黄エイ・原理充雄・手塚武・神谷暢・竹内てるよ(他)

大正十四年四月―昭和三年六月(広東、東京、神戸他)

(一六)

詩戦行 斎藤峻・細田東洋男・小林一郎・局清

大正十三年十一月―昭和二年六月 (東京)

(一三)

先 驅 高橋久由・草野・坂本遼・手塚(他)

昭和二年五月―六月 (東京)

(二)

バリケード 萩原・中島信・河本正男・小野・津田出之(他)

昭和二年九月―同十一月 (東京)

(三)

学 校 草野・伊藤信吉

昭和三年十二月―同四年十月 (前橋)

(七)

弾 道(第一次) 小野十三郎・局 清

昭和五年二月―同六年五月 (東京)

(七)

弾道(第二次) 小野・植村締・岡本・局、伊藤和(他)

昭和八年(東京)

(五)

馬

伊藤和・田村栄・鈴木勝(他)

昭和五年五月―同十二月 (千葉県)

(八)

北緯五十度 猪狩満直、更科源蔵、渡辺茂(他)

昭和四年十二月―同十年六月 (北海道)

(一一)

豊橋文学 御手洗汎・佐藤長吉・赤石鎮(他)

昭和九年―十年 (豊橋)

(六)

農民小学校 鈴木武・石川和民・鈴木致一・古山信義

昭和五年三月―同十年十二月 (静岡県)

(一〇)

クロボトキンを中心にした芸術の研究 萩原恭次郎(個人誌)

昭和七年六月―同十年十二月 (前橋)

(四)

詩行動 清水清・植村・小野・長谷川七郎・丹沢明・岡本・局(他)

昭和十年三月同十年十月 (東京)

(七)

詩作 甲斐崑太郎・丹沢明・北本哲三・小野・局・長谷川(他)

昭和十一年四月 (東京)

(二)

(注) 左記は記録の正確を欠くもの

黒嵐時代(東京)、黒い砂地(東京)、南方詩人(鹿児島)、壁(埼玉)、朝(東京)、風(茨城)、

茨城文学(茨城)、無風帯(東京)、一千年(名古屋)、手旗(静岡)、

(注) 動脈(短歌誌・東京) 昭和九年九月同十年五月(四)

(注) 戦後のものは省略

あとがき

あるとき、ふとそのことに思い至ってしばしためらう自分自身を眺めた。昭和はじめごろ(一九二〇年代後半からの約十年間) マルクス主義プロレタリア文学が可成の隆盛と見えたころ、それと対立的にアナキズム文学という主張があり、そのささやかな活動のはしぐれにいたことが、ふいと霧散するように、心許なく思われたのである。私自身にとってそこには問題が二つあった。一つは今ごろ、こういうことに思いを馳せるのはオレひとりではないか。二つにはあの主張と活動の全体に、ある不審を向けようとすることは、今後に責任の重大なる問題提起であり、それを背負う勇気があるか、ということであった。しかしかつて活動があり、その活動の事実を知り、そ

秋山 清
1905年、福岡県に生まれる。
主要著作
詩集『象のはなし』(1959年)
◇ 『白い花』(1966年)
◇ 『ある孤独』(1967年)
◇ 『秋山清詩集』(1968年)
『文学の自己批判』(1956年)
『ニヒルとテロル』(1968年)
『戦後詩の私的回想』(1968年)
他
住所 東京都中野区鷺の宮6の8の28

秋山 清 アナキストの文学

1970年4月5日 発行
定価240円

麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル
振替 東京144722

のこの評価を三十年後に改めつつ且つ再確認することは、生き残った者の責任でなければならぬ。そう思ったところから、一九六八年に「アナキストの文学とアナキズムの文学」(本の手帖・アナキズムと文学)をかき、それにさらに書き加えて、『黒の手帖』第八号に同名の文章を発表したのは昨年十一月であった。それがこのパンフレットの第一章である。昭和という時期を通じ戦前から戦後にかけての「政治と文学」という問題がささやかな意見の提出でもあり、アナキストたちが文学についてそのことで割り切れなかったことへの回想的自己批判でもあるのである。

もちろん、まだ私の意見は前進していない。立止まりふりかえって、小首をかしげている程度ではないが、ここが出発点になるものではなからうかともかんがえる。政治に従属しない文学、というものを考えるために私は、アナキズムなる思想のための文学活動が昭和初年にさかのぼって否定的に再確認される必要があるのではないかと思ったのである。自己反省であり歴史の再確認という意味を見出したいのであった。

だから、第二章以下は、まったく不備不十分を承知のうえで、この反省的な主旨の補足として書かれたものである。文学は精神の仕事であるから、あくまで個人的に、あくまで自由でありうる。その場からアナキズム運動の組織についても、文学活動の組織についても、もう一度考え直されていいと思う。(七〇、三、五)

1. 私の見た日本アナキズム運動史 近藤憲二
 定価 250円 (〒 35)
 円大杉栄の片腕として活躍した近藤憲二氏が体験をもって語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。
2. 社会革命の綱領 M・バクーニン
 藤山 順訳
 定価 200円 (〒 35)
 イタリア時代の秘密結社、社会民主国際同盟などの綱領のほか、ネチャーエフとの作といわれる革命家の教理問答を収録。
3. 独裁と革命 L・ファブリ
 減水三郎訳
 定価 200円 (〒 35円)
 マラテスタの信頼厚かったイタリアのアナキスト・ファブリがロシア革命の経験に基づき、1920年、イタリア革命闘争の高揚期に公表した革命の理論と戦術。
4. クロンシュタットの叛逆 A・ベルクマン
 小池英三訳
 予価 200円 (〒 35円)
 ロシア革命の花とうたわれたクロンシュタットの水兵たちがなぜ叛逆ののろしをあげたか？ 彼らの要求はなんであり、ボルシェヴィキはいかに彼らを抑圧したか。

以下続刊

ドイツ労働者評議会運動

—その起源—	コピット・プレス
反逆と革命	秋山清
叛逆する労働者	I・W・W
スペイン革命論	スペイン革命研究会